

説教 『地の裏に天、天の表に地』山本 護 牧師
聖書 申命記 31:30～32:3 / マタイによる福音書 6:8～11

イエスが教えた「主の祈り(マタイ 6:9～13)」とは何であろうか。この簡潔さもいいけれど、私たちならもう少し気の利いた祈りをするのに、と思うか。主の祈りを教えたきっかけは、「弟子の一人がイエスに、[主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください](ルカ 11:1)」と求めたから。はて、弟子であるくせに祈り方も知らないのか。そればかりかパウロでさえ、「わたしたちはどう祈るべきかを知らない(コリ 8:26)」と語っている。祈りとは、いったい何であろうか。

そうか、私たちは「祈り」を知らないのだ。祈りは、唱え方に習熟して「うまく」なることではないし、ましてや一心不乱に祈念して「効果」を上げることでもない。祈りは「“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる(8:26)」真実の声。それゆえに「聞き届けられる」。

神は「願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ(マタイ 6:8)」。かといって「果報は寝て待て」ではない。隅々まで知られているゆえ「こう祈りなさい(6:9)」と命じた。「天の父よ」と呼びかけ「御名が崇められるように、御国が来るように、御心が行われるように(6:9～10)」と祈る。御名や御国とは、天国に関することなのか。いや、その一方で「天におけるように地の上にも(6:10)」、「必要な糧を今日与えてください(6:11)」と、私たちの「今」をも祈る。祈る方向は、天の聖なる御心か、あるいは地にある俗なる現実か。どちらか一方ではない。両者は分かちがたい一つの現実なのだから。

「天よ、耳を傾けよ、わたしは語ろう。地よ、聞け、わたしの語る言葉を(申命 32:1)」。「わたしは主の御名を唱える。御力をわたしの神に帰せよ(32:3)」。これはモーセが教えた歌(31:30)。旅する民はこの詩を折々歌った。ここには天と地の境はない。神の御名と御力は、天と地に満ち溢れている。「わたしの教えは雨のように降り注ぎ、わたしの言葉は露のように滴る。若草の上に降る小雨のように、青草に降り注ぐ夕立のように(32:2)」。天の恵みは、地の命として輝く。それゆえに、私たちが生きている地が蹂躪されれば、天もまた踏みじられる。天の聖と地の俗は結びついているのだから。

私たちは忠実な時も、背く時もある。だが、それで恵みが増減するわけではない。恵みは愛であり、現実には赦しであるから。「天におられるわたしたちの父よ(マタイ 6:9)」という呼びかけは、御自身を献げたイエスの祈りと重なる。「父よ～わたしの願いどおりではなく、御心のままに(26:39)」。こう祈るイエスに助けられ、私たちは「御心が行われるように、天におけるように地の上にも(6:10)」と祈る。

「天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている(11:12)」。今ここに到来しつつある御国は、地上の罪と虚無によって汚されている。私たちはこの虚無のただ中で祈る。私たちは効果的な祈りを知らない(コリ 8:26)。すなわち戦略的な手法などない。ただ「“霊”自らが執り成してくださる(8:26)」ことに依拠し、金や武器を恐れず、素手で未来にむかう。今、地上で起こっている摩擦が、敵であっても味方であっても、ただキリストの愛と赦しの真実を共有するために論争し、戦い、そして祈る。「御名が崇められるように、御国が来るように(マタイ 6:9～10)」と素朴に祈る。



【おまけのひとこと】

地が天と共に在るように 天もまた地と共に在る 悔い改めは罪ゆえに在り 救いもまた虚無ゆえに在る 神は？ 人間を勘定に入れない神は 私たちにとって 体温のない形而上学となろう